

戦中派学生から日本社会経済史研究への道

秀村 選三

私の研究生生活を回顧するつもりで書き始めて、初めは研究生生活の過程を簡潔に書こうと思っていたが、途中で恩師

宮本又次先生の『研究生生活の回顧』を読んで、研究生生活はただ学問研究の過程のみを書いても一方的な観点で、独善的に陥りやすいことに気づき、先生のようにもつと広い視野で見えてみようと思うようになった。しかし先生の抜群の記憶力や日頃の研究生生活、御家庭・親族関係、社会関係さらに芸能や文化関係での御活躍に豊富な資料を日頃保存されていたのには及びもつかず、私なりの回顧を綴るほかないと思うようになった。ただ私なりの小さな体験でその時代の雰囲気を書きとめようと考えている。古代史への夢か

ら日本経済史の研究へと迷い込んだ戦中、戦後の私のあり方を書き留めておきたいと思う。

一 幼いころ・小学生

私は一九二二（大正一一）年の生まれで、幼い日の思い出の最初は四才の頃、長兄範一（二四歳年上）と共に現在の西鉄（当時は「久留米行き急行電車」と呼んでいた）の葉院駅の近くの蓮華畑で蓮華草をつんだ記憶である。駅は一面の広い蓮華畑の中にポツンと小さな小屋があるだけ。大きな高架駅となり、六両連結の特急が出入りしている今の葉院駅を見ていると九〇年の時の流れの烈しさを思うので

ある。

私は幼い日から歴史が好きだった。小学校一年の夏休み
の「小学生日記」に事項、事件を五十音順で並べた表が
あって、これを「年代別に並べ変えましょう」と母が言っ
て、親子で並べ替えて年表にしたことがあり、これが歴史
を学んだ最初であった。母が絵本で一の谷の敦盛の話を読
んでくれて「小さいお兄ちゃん（次兄欣二、一〇歳上）位
の若武者よ」といったのを覚えていた。当時アルス社から
児童文庫という本が毎回二冊ずつ美しい装丁で出ていて、
今思うと大正デモクラシーの名残りであったと思うが、
「これは選ちゃんの本よ、字が読めるようになったら読み
なさいね」というので、自分の本と思っていたら、次兄が
中学校から帰ってきて、寝ころびながら忽ち読みあげてし
まうので、自分のものを取られた気がして、負けん気だ
とたどしくも読めそうなどころから読み始めた。やがて小
学校の三年生の頃から児童文庫の『源平盛衰記』を読んだ
りした。

担任の武末ツネヲ先生（女性）も義経や鎮西八郎為朝の
話などをしてくださって歴史が面白くなり、児童文庫の
『日本歴史物語』の中巻（平泉澄著）を繰り返し読んだ。平

泉さんが極端な神がかりになる前の著書であろう。源氏・
平家の物語が面白く、私なりに源平の系図をよく覚えて、
以後多くの家の系図に興味を持つようになった。

下学年の時は、長兄は旧制松江高等学校の生徒で、休暇
で帰省した時には松江のゆべしや出雲神話のスサノオノ
命・スセリ姫・オオクニヌシノ命の土人形を土産にくれた
りしたので出雲の神話に興味を持ち、さらに天照大神の神
話や古代の物語にも惹かれて『日本歴史物語』の上巻（喜
田貞吉）を読むようになった。下巻の近世は読んだけれど
もなぜかあまり興味を感じなかった。

やがて納戸にあった長持ちの中の古物に興味をもち、何
やかや引っ張りだしていた時に、姉萩野（九歳年上）の小
学校五年の『小学国史』の教科書を見つけて、文語文で古
風に書かれているのに歴史を感じて大きな声で読み大変嬉
しかった。その後も納戸の中の探索を続けて、次兄の中
学校のいろいろな教科書を見出し、ことに国史の教科書は嬉
しかった。歴史に関連する児童文庫の幾つかはますます歴
史の好きな子供にしてくれたようである。ことに濱田青陵
の『博物館』は考古学の面白さをとくに感じて繰り返し読
んだこともあり、当時福岡市役所の近くにあった市の博物

館の貧弱さには子供心にもまったく失望したものであった。小学校四年二期から卒業までの担任の貝原種夫先生は、クラスの希望者を日曜日や休日に太宰府の都府楼、観世音寺・戒壇院や宝満山など各地の史跡に連れて行ってくださった。ことに衝撃的だったのは五年生の時、下白水（現在春日市）の日拝塚に連れて行っていただき羨門から入って羨道を通り玄室に入って、巨大な石が組み合わされているのを目の当たりにした時には、そのすごさに圧倒された。宿題ではないのに、その日の感激を作文にして母に見せたら頭を撫でてくれた。

五年の頃『少年菊池武時・武光の勤王』（吉松祐一、大同館書店）という本を読み、菊池一族の平安期の祖先以来、刀伊の入寇から元寇、建武中興の時の武時、多々良浜の武重、筑後川の戦いでの武光、南北朝の武朝までの歴史に魅せられて繰り返し繰り返し読んでいた。一つの家の歴史をその時代と共に学ぶことに興味をもち、それは今も続いており、この本は私の学問の一面を作ってくれたようである。

小学校五年の時父に連れられて父の郷里の椿（福岡県飯塚市、宇佐八幡宮の庄園椿庄の椿八幡宮）を訪れ、私が本家の宮司の系図を写したいと言ったら、当主（父の甥）が見

せてくれて写した。父は我が家のことを度々話すので、我が家や地方の歴史にも関心をもつようになった。

福岡高等学校の生徒だった次兄は歴史の研究会（玉泉大梁先生が指導されていて、当時の名は考古学会、私の頃には史学会）に入っていて、ある時明日報告するからと言って家族に『日本絵巻物集成』の「道成寺縁起」の絵巻を見せながら説明してくれた。清姫が安珍を追って足や腿もあらわに走り出すところになると、ねえやの芳ちゃんが「ほう、どうかあ、どうかあ（何という恰好であることか）」と面白いことをいうので一同笑った。

次兄は私が歴史を好きなのを知って、五年生頃から歴史上の人物のあてっこをした。戦後ラジオでの「二十の扉」（私たちは二十以上もしていた）のようにいろいろ尋ねて、相手の思っている人物を当てるゲームであった（兄が答えられず得意になって答えを言うとそれが間違いのこともあった）。これは家の中や散歩の時でもいつもしていたが、私が中学三年の一九三七年八月、兄が大学院三年目の時に召集令が来て、以後丸三年中国に従軍したためゲームは終りとなった。

一九三一年小学校三年生の時に、満州事変、その後昭和

一〇年ころまで、上海事変、国際連盟脱退 五・一五事件・天皇機関説問題・軍務局長斬殺等の事件があったり、大変な不景気で、ルンペンとか「大学は出たけれど……」などといういろいろ言われる時代であった。幼い感覚では、兄たちが親戚の者達からいろいろ訊ねられるのだが、それに応じる態度は、過激な軍人や右翼には批判的であった。まだ大正デモクラシーの名残りがあったのである。少なくとも兄たちの大学生としての感覚や家庭の雰囲気はその後の社会感覚とは随分違っていた。上海事変の時、爆弾を投げつけられ負傷して九大病院で治療されていた重光葵公使に教会の日曜学校からお見舞いに行き、以後重光葵氏には常に親しみをもつようになっていた。

二 中学校生のころ

一九三五（昭和一〇）年県立福岡中学校に入学した。長兄が入学祝いに研究社の大英和辞典を買ってくれて長く使った。大きい辞書を使うのに慣れると言ってくれた。

福岡中学校は、藩校の伝統ある修猷館とは違って、大正デモクラシーを標榜して創立された中学校なので、母が「これからは明治のバンカラではなく紳士教育の時代」と、

修猷館に学んだ父が不機嫌だったのに長兄に受験させたそう、以後次兄、私と兄弟三人は福中の卒業生である。わりに自由な校風だったが、高校への合格者数で修猷館とはシューゲームで先生方からは常にハツパをかけられた。私は数学が苦手で苦勞し、勉強といえれば数学というほど努力したがあまり成績はよくなかった。

福中は博多に近接しているので博多の子弟も多く、いつもは電車通学だが、帰途博多の古くからの町並みを歩いて親しみをもつこともあった。後年『博多津要録』など博多の史料集を研究仲間とともに編纂したのも、その影響かもしれない。父は夏の夜の散歩に子供たちを引き連れて福岡の昔の六町筋から那珂川を渡り博多の川端あたりまで歩き、途中明治・大正の町並みや店のことを話してくれたが、もっと詳しく聴いておけばよかったと思うことがある。

父は中国語が堪能で満鉄の山本条太郎・松岡洋右総裁の頃、中国人の要人との交渉のため総裁顧問をしていて奉天・大連・北京・東京へと飛び回り、山東省の魯大^{コンス}公司で日本側代表、山東鉱業株式会社の社長をしていた。父は自分を燕に譬えて「満州から玄界灘を飛び越えて東京から福岡の巣に帰ると、子供たちが燕の子のように嘴をあけて餌

をねだる」と言っていた。父の土産の青島の干し肉とドイツ時代からの分厚いチョコレートは当時の日本にはなくて、おいしかった。

母は大変慎重な人で二人のお手伝いさんを上手に使い、職人さんたちを大事にしていた。父が帰ってくるとお客さんも多く、料理人や加勢人も来て、家中緊張し母や姉は大変であつたろう。病弱だったので余り外には出ないが、病人の方へのキリスト教の伝道には熱心であつた。母の部屋には書棚に聖書とキリスト教関係の本と国文の本があつたし、姉が女学校から帰宅して学校や友達、数人の外人の先生のことなど何やかや話すのを横で聞いているのは面白かつた。寒くなると母の部屋は火鉢に湯気をたたせてどこよりも温かいので、ここでおやつを食べながら国文学の本を読んだ。戦災前に早く疎開させていたのだから、『万葉集総釈』は戦災後も残っていたので、母の形見と思ひ読んでいる。母はいつもこの部屋で聖書を読み、多くの人に手紙を書いていた。姉は結婚前に買ったもらった着物は戦災で全部焼けてしまったが、なによりもリング箱一杯の母の手紙が最も大切なものだったのにと残念がっていた。母の手紙は美しい文字で懇切丁寧に書かれていて、私は海軍の

上官からは度々「君の母上から手紙をもらったよ」と言われ、宮本先生からは「とてもいい手紙だから君にあげる。大事にしたまえ」と言つて頂いた。

長兄は九大卒業後、朝鮮銀行に決まりかけていたのに、家を守り、弱い母を見よと父から言われ、十七銀行、今の福岡銀行に勤めていた。郷土史家木下讚太郎氏の会の会員になつていて、「九州史苑」というパンフレットをいつも私にくれた。史蹟の見学、現地講演があると連れて行つてくれ、立花山や四王寺山に行つた日々はなつかしい。兄は散歩が好きで平尾の浄水地などよく連れて行つてくれたが、郊外の山々や志賀島、三苦の砂丘などが好きでいつも連れて行つてくれ、私は自然とその地の歴史を学んでいた。母が頼んだのであろう、土曜の夜には矢内原忠雄先生の『キリスト者の信仰』を一緒に読んでくれた。

福中の先生方は今思つても優秀な方々で、歴史の先生ではベテランの柴田先生に東洋史を、塚本先生に西洋史を習い、有光（後、磯貝）先生には五年生の時に日本史を習つた。どの先生も楽しい授業で益々歴史が好きになった。有光先生はある時、教科書には全く出ていない博多の商人宗金のことを一時間中話され、私は中世の博多の町と海と中

国との交流に全く魅せられた。国語の本山親民先生には三年生以後古文の勉強を大変魅力的に教えて頂いて、国文が好きになり後に古文書を読む素地を教えられたようで感謝している。文芸委員になって校友会誌に種々執筆させられこれは文章を書く訓練になった。三・四年生の時の隣りの席の長保君とは最も親しかったが、「お前は歴史家になりやい(なれ)」と言ってくれた最初の人であった。

五年生の時の英語の小倉先生は、教科書だけでなくロングフェローの詩などをプリントしてきて教えられ人生を考えさせられて印象深い方であった。

私は博物学も好きで博物研究会に入っていた。毎年夏休みには霧島山・九重山・熊本県の内大臣山等に昆虫・植物採集旅行に行き、山や田舎の生活を知ることができた。ことに内大臣山では平家の落人の伝説や山の生活を学んだ。中島先生は植物にすごく詳しくて、今思うと植物を先生にしっかり習うべきだったと思う。後に古文書に出る植物や各地の調査地で種々の作物に私は知識がなく、あるとき先生に植物の基礎知識を与えられたのに惜しいことをしたといつまでも思っている。

四年生では、修学旅行で約二週間位だったろうか、朝

鮮・満州国に行った。朝鮮の山野の風景、悠々と流れる洛東江・漢江に魅せられた。当時は朝鮮服を着ている人が多く、古代や中世の朝鮮や日本の古代の人々を見る感じがした。平壤で古墳を見学して、はるか古代の東アジアを思い歴史を学びたい気持ちがあります強くなった。朝鮮から満州国への国境の鴨緑江の鉄橋は(その後幾つも国境を越えたが、最初に越えた国境として)いつまでも印象深い。日本の警備兵が乗り込んできて、何も言わずにデッキに立っていた朝鮮人数人の顎をぶんなぐって中に入れて命じたのには私たち生徒は啞然とした。以前朝鮮で教職におられた先生が「この地方の朝鮮人は扱いにくいのでね」と兵隊を弁護する口調で言われたが、生徒にとっては植民地支配の実態をまともに見せつけられた時であった。

満州国では奉天(瀋陽)で清の帝陵や撫順炭鉱を見学した。撫順の露天掘りの巨大さに驚いたが、後年九州大学でゼミ生や留学生が撫順を研究テーマにした時には撫順を見ていてよかったなと思った。新京(長春)では、関東軍司令部で東条英機参謀長が屋上から各地の説明をしてくれ、勝子夫人が国防婦人会の人たちとともにお茶を振舞ってくれたが、下学年に東条の息子がいたからである。同学年の

生徒たちは息子には迷惑していたらしい。

満州の大平野も、これが本当に平野というのだなと思ひ、大平野の夕日には軍歌「战友」中の歌詞「赤い夕陽の満州に」を実感した。さらに関東州の旅順では博物館で西域のミイラを見学して、遙かな西域の歴史に思ひを馳せた。日露戦蹟の東鶏冠山堡壘や二〇三高地、旅順港、水師營などを見学したが、やがて六年後には、この旅順で海軍予備学生として厳しい訓練を受けることになろうとは思ひもしていないことであつた。

五年生の時には学校教練一五周年の記念で上京、台上に直立された昭和天皇の前での分列式に校旗を先頭に行進した。東京往復は軍用列車で大変長く時間がかかり、出征兵士と間違えられて「万歳」で送られた駅もあつた。その時汽車の窓から歴史や国語で習った各地の歴史の風景には感動した。

私の感覚では、一九三六年の二・二六事件の時には先生方が生徒よりも緊張され、不必要なほど生徒たちに「雨降って地固まる」「冷静に」と訓示された。やがて一九三七年に始まった北支事変（後に次第に大きくなって日中戦争）以降、次第に学校の教育、訓練も、社会の風潮も変

わつていったが、それでも太平洋戦争中末期のような狂氣的な厳しさは全くなかつた。この頃よく思ひ出すが、三年の時、当時女性のスカートがだんだん短くなつてきたので、クラス担任の先生が「そのうちに女性がズボンをはくようになるよ」と言われて一同ドツと大笑いした。自転車に乗つた女性には悪罵を投げつける時代であつた。

三 福岡高等学校

一九四〇（昭和一五）年に福岡高等学校に入学した。入学祝いにもらつたお金で伊藤常足の『太宰管内志』上下二巻、黒板勝美『国史の研究』三巻を買つた。

クラスは文科甲類で第一外語は英語、第二はドイツ語。英詩を浦瀬白雨先生から習つた。夏目漱石の弟子で詩人であつた。キーツやシェリー、ワーズワースなどを習つたが、ことにグレーの「墓畔の哀歌」はいつまでも忘れられず、海軍にいるとき、その詩集を送つてもらつたこともあつた（海軍は英語には寛容であつた）。イギリスの村でストーンヘンジへの道を歩いていたら、村の風景に思わず以前暗唱していた一節が口をついて出てきて驚いたこともあつた。浦瀬先生は授業中に英文学は聖書を学ぶことが大切だと言わ

れ「野の百合はいかにして育つかを思え。……栄華を極めたるソロモンだに、そのよそおいこの花の一つにも如かりき」（マタイ福音書第六章）という長い文をよどみなく暗誦されて一同魅了された。語学の先生は浦瀬先生のように詩を教え、人生を語る方であってほしいと思うようになった。大内覚之助先生も人生を考えさせる話をよくされたが、他の先生はただ訳読を急がれるのみであった。

二年の時に外人教師に若いジョージ・ポッターさんが来た。ハーバードを出たばかりで日本の研究をしているので、日米の歌を教えあつたり、生徒が日本のことを教えたりして仲良くなった。後に私がハーバード・エンチンに行つた時に、上手な日本語でよく説明してくれる人がいて、名前を訊ねたら、ポッターといわれた。風貌は全く変わつていたが、思わず「福岡高等学校のジョージ・ポッター先生ではありませんか」と言つたら感激して、とたんに英語で凄く速く話されるので全く分らなかつた。開戦の時に福岡の刑務支所に収容されて大変な苦勞をし、英語の大内先生、ことに先生夫人が誤解を受けながら大いに世話されたのである。家に来いと言われてお供したが、夫人はなんと同じく高校のドイツ人教師ウルハン師のお嬢さんで大変款待

された。

入学後すぐ玉泉大梁先生の史学会に入った。玉泉館という全国の高校で唯一の歴史地理参考館があり、校舎・寮は木造なのに、ここだけはコンクリートの立派な建物で、中に玉泉先生たちが発掘された考古学的遺物や筑前の大庄屋三苦家の古文書、その他の文書など多数の史料が整然と陳列、保存されていた。テーブルを囲んで生徒たちが自由に歴史や考古学を学べるのは大変嬉しかった（このテーブルで私は一九七〇年代半ばから定年まで、学部を問わず学生たちと「古文書を読む会」をした。大学紛争後、学生とは学部学生となる二年の後期からではなく、一年の時から接していなければならぬと思ひ始めた会であった。九大の教師生活の中で最も楽しい思い出の時である。その時の学生から優秀な研究者ごとに歴史家も出ており懐かしい）。

当時は岡崎敬さん（後、九大教授）が考古学に熱心で、時代は神がかり的な歴史が盛んな時代だっただけに、それに反発して、自然と一年上の岡崎さんのリードで土器の計測や当時新鮮に感じた弥生時代の新しい研究をしていた森本六爾・小林行雄の本を読んでダベリあつた。板付に発掘に行つて岡崎さんがここを掘ろうと言つたら、玉泉先生が

どうかと言われたが、生徒たちはどこでもよいから掘ろうと掘ったら甕棺が出てきたのは驚いた。中は土ばかりで副葬品はなかったが、岡崎さんは凄いなと思った。

秋の運動会には玉泉館を市民に見学してもらうので、その企画・陳列・説明を考古は岡崎、歴史は私が受け持った。一年の時は覚えていないが、二年の時は私は玉泉先生の指導を受けながら飛鳥時代から鎌倉時代まで、時代ごとに大きな仏像の写真を並べて解説し、市民に説明した。後に京都大学で大学企画の現地見学会に度々参加し、源豊宗先生はじめ専門の先生方の講話を聴く素地となった。

玉泉館の近くには図書館があり、読みたい歴史の本は多く、近くの藤棚の下には石棺が発掘状態のまま保存され、近くの芝生の上に寝そべてダべった。図書館では和辻哲郎『日本古代文化』や誠文堂の『日本文化史大系』の古代などを讀んだが、請求しても「これは閲覧禁止です」というのがあり、津田左右吉『古事記及日本書紀の研究』・『神代史の研究』やモルガン『古代社会』が禁止で、「どうして……?」と思った。もっとも閲覧禁止の社会主義関係や日本古代、その他の禁書が貸出口の近くの書棚にずらりと背表紙をこちらにむけて並べてあった。せめて本の外形を

覚えよと図書係の先生の皮肉な抵抗だったのだろうか。

高校は一年の数学は非ユークリッド幾何学で今まで習った幾何学とは全く違い面白かった。高校一年の終わりに、今後一切数学とは縁が切れると、数学の教科書・参考書・ノート等全部を集めて焼き、鬱憤を晴らし気がせいせいしたが、人生そう甘くはなく、海軍でまた数学があつた。もっとも海軍での数学は成績が良くて我ながら意外に思った。教え方が上手で、抽象的でなく、ユーモアもまじえて私の頭にも受け入れやすかつたからであろう。

一年から二年の前半の頃までは日中戦争中とはいえ、まだ「三年の春」、「自治自由」を謳歌して弊衣破帽で闊歩した。ことに私は一年の秋、井原山に登り、下山の途中リーダーが道を間違えて藪の中を夜おそくまで歩き回り、茨のために夏服が酷く破れた。後に京都大学受験の時に、これではあんまりだと理科の浜清君（現日本学士院会員）の服を借りて受験に行った。

一九四二年二月には高校三年の課程が二年半に短縮されると発表された。高校三年の半年は授業は駆け足で全く落ち着かなかつた。もっとも一学期だけの浮足だった授業の中でも、穴山先生の万葉集と国文学史の講義には深く感銘

を受けた。ことに万葉集初期の歌は二年の時玉泉館で展示の時学んだ飛鳥・白鳳時代の美術とが重なって、六・七世紀あたりの歴史には今でも心惹かれ、時々その時代の本を買って読むことがある。また哲学の山本清幸先生は京都在学で学ばれた方で短い時間数だが心惹かれる講義をしてくださった。先生の講義を聞いて林市造が「京都に行つて哲学を傍聴しようや」と言うと、何人かが同調していた。

学校でも学生の不満に対して、正規の授業ではないが玉泉先生の「百王思想」や井上以智為先生の「シナの民衆社会」の特別講義があつた。百王思想は中世に天皇は百代で終わるといふ思想で、大変詳しく話されるので、私は学生ながら「大丈夫かな」と思ったが、最後に百王から万世一系の天皇への思想への発展の話で結ばれたのでホツとした。井上先生は中国の民衆の社会は道教が中心の社会であることを話されて、中学以来漢文で中国は儒教の社会とばかり思つていたのがまったく新しい目で中国を見なければならぬことを学んだ。いつまでも忘れられない。

一九四一年、高校二年の秋くらいから文部省の高校への締め付けが強くなり、またそれに同調するナチスに心酔した先生もいて生徒課もきびしくなり、かつての自治自由も

次第に失われつつあつた。全生徒は運動部の各部のどれかに入らなければならず、私は一年の時は跋渉部（ワンダーフォーゲル）にいたが、新しく剣道部に入った。放課後何時間も暗くなるまでの訓練で、それもインターハイのため、私が学びたいと思つた剣の精神ではなかつた。暗くなるまで時間をとられ、疲れて英語・ドイツ語の予習にも困つた。私は史学会と聖書研究会に加わつていたが放課後自由に文化活動ができなくなつたので、折竹校長の御自宅に文化部関係の数人の生徒と一緒に訴えに行つた。折竹校長はフランス語の著名な辞書を編集された学者で、自治自由を尊ばれていた。校長は「以前三高と海軍機関学校とで毎年サッカーの試合をしたが、三高は長時間練習するが、海軍の方は短い時間しか練習できないのに、毎年海軍が勝つていた。長時間頑張るのがよいとは言えない」と言われ、文化部の会は願ひを出して運動部を欠席して会ができるようにしてくださつたが、運動部の生徒からは白い目で見られるのが嫌だつた。

先にも書いたように高校が二年半に短縮されることになつたため二年の二月頃、急に志望の大学や学部・学科を決めなければならないようになり、級友は割に早く決めて

いたが、私は国史学科に行きたいと思っていたのに、次兄からは「国史には行くな。国史は神がかりの歴史で横文字も読まず、学問としておかしくなっている。全国どこの大学も国史は駄目だ」と言われた。東大大学院で古代史の村川堅固教授の指導を受け、今井登志喜教授の自由な学風の中にいるだけに、日頃はあまり悪口を言わぬ兄が国史の学風を悪く言うし、そういえば、講演や新聞・ラジオの論調も私なりにおかしくなっていると思っていたので、どこの大学の何科を志望しようかと大いに悩んだ。兄はどこが良いたとは言わないし、友達のもとどが法学部・経済学部にきめているので、兄のように秀才ではない自分は、友達と同じならば法科よりも経済かなとも思ったりしたが、やはり日本の歴史には未練があった。

聖書研究会で長く指導を受け、学校の寮で合宿してキエルクエールの『死に至る病』を、能古島で合宿してルターの『キリスト者の自由』を読んでくださった河野博範先生（九大助手、後、西南学院大学教授）には度々祖原の御宅に御相談に行った。私の悩みを熱心に聴かれて質問もされたが「悩みから逃げるな」と度々言われた。具体的にどこ大学の何学科ということではなく、ものの考え方を大いに教

えられた。幾晩も押しかけて迷惑されたであろうが、私にはその配慮はなかった。ある時は親友の林市造がついてきてくれて、明け方まで話し込み、朝飯を頂いて、まぶしいような緑の朝を二人で帰ったこともあった。

国文の穴山先生に「日本古代史をやりたいが、それができず霧囲気ではないので神話学を志望しようかと思つています」と話したら、神話は方法論がとて難しいよと勧められなかった。その後も日本神話の本を読み、世界の多くの民族の神話との比較研究や理論を読んでは大変だなと思ひ、先生の言われていた意味が分かった気がした。

三月中頃だったと思うが、三年の猪城博之さん（後、九大倫理学教授）と京都、大和へ行った。猪城さんは聖書研究会の先輩で実に多くの本を読んで話しかけられるので大いに影響を受けた。私は勧められる本を読むようになり、いつも多くの事を議論して教えられ、腰巾着のようについて廻った。猪城さんは哲学書の読み過ぎで落第し、三年生を二回されたので私は猪城さんと二年間交流できて幸せなことであった。私がドストエフスキーを多く読んだのも猪城さんのおかげである。猪城さんがカントの原書がレクラム文庫にあるに違いないから京都に探しに行くので手伝っ

てくれと頼まれ、京都の南禅寺の僧房帰雲院にいた湯川達さん（京大在学中、後、詩人）を頼って泊まり込み、毎日古本屋を廻ってカントの実践理性批判・純粹理性批判の原書を探した。結局はどちらも猪城さんが探し出されたが、古本屋を廻る楽しみを知った。当時の福岡には古本屋は六、七軒くらいしかなかった。数日後奈良の西大寺に行き、別れてからは一人で大和の万葉の土地を歩き、さらに伊勢に行き、日本の古代文化を学びたい気持ちはますます強くなった。帰途三輪山を訪ね、三輪の宿で朝、ハワイ攻撃（一二月八日）の九軍神の発表を新聞で見て衝撃を覚えた。

特攻の最初だが、まさか後に親友の林市造はじめ多くの友達の特攻死することになるとは思いもしなかった。

三年生になり四月、五月になってもまだ大学の志望が決められず悩みに悩んだ。やがて本庄栄治郎著『日本経済史』や同著者には多くの経済史の本があり、また中村吉治著『日本経済史』や古島敏雄著『日本封建農業史』も出て、経済学部や農学部でも歴史を学ぶことができることを知ったものの、経済学や農業経済を学ぶ気持ちはなく、やはり迷いに迷っていた。やがて玉泉先生を訪ねたが、先生は国史の御出身だから国史をすすめられるだろうと期待して

いかなかったが、思いがけなく「京都大学の経済学部の本庄栄治郎という方がおられて経済史の人が多く育っている。

京都の経済学部に行つて経済史を学んだらいいよ」と言われ、さらに「社会科学を学んで歴史を学ぶのもいいよ」と言われた。当時は「社会科学」という言葉は禁句であったが、先生が言われている「社会科学」の意味は、当時のマルクス主義や左翼思想など危険思想とされている「社会科学」ではなく、経済・政治・法律・社会学などを広く学んで歴史を学んだらと言われていることが何となく理解でき、やがて京大の経済学部を志望することにした。

学校の日々の語学の勉強ができないほどに悩み、成績も下がったが、振り返って思うと、一生に関わる最も大事な時であったと、心から感謝している。後に知ったが玉泉先生は昭和初年に著書『室町時代の田租』や「鎌倉時代の貨幣流通」・「江戸時代の人身売買」などの論文を出されていて、経済史の草分けの時代のお一人で、本庄先生ともお親しかったらしい。

東京の兄に「京都の経済に決めた」と便りしたら、電報で「トウキョウニコイ」と言ってきたが、今更兄から何か言われるのは「もういい」と言う気持ちで行かなかった。

あの時兄は何を言いたかったのか、一生訊ねないままで、兄も何も言わないままだったが、兄は私が困り果てて兄に相談すると思っていたのではないか。このごろよく思うが、兄は三上次男さんと親しく一緒に仕事をし、お互い東大定年後、青山学院でも一緒だったので、或いは私が手を挙げたのを待って「東洋史に行ったらどうか」というつもりではなかったかと思う。私も東洋史は考えないではなかったが、漢文をしっかりと読まねばならないだろう、漢文は好きだけれど専門となればこれも簡単ではないぞ、むつかしいぞと敬遠する気持ちもあり、やはり日本古代の魅力の方が強かった。後に中国史や朝鮮史の観点から日本の古代を学んだら面白かったかもしれないなとも思ったが、今もそう思っている。

これまで兄を模範にしていたのが、この時兄から独立し、同様にこれまで高校二年、三年に腰巾着のようについて廻った猪城さんが九大の哲学に入学したために、猪城さんからも次第に独立するようになった。

兄は東京高校で高校生の永原慶二・柴田三千雄・堀敏一・木村尚三郎ら後に優れた歴史家になった人を教えたことをいつまでも自慢していたが、生徒に本をいろいろ紹介

するためリユクサツクに本を詰めて満員電車に乗って通うのには驚いた。私にもいろいろと本を送ってくれたが、歴史というより広く文化や社会を考えさせる本であった。おかげで当時はやりの河合栄治郎の「学生叢書」のブームには私は覚めた目で接したようであった。

四 京都大学経済学部にて

一九四二（昭和一七）年一〇月京都大学経済学部に入學。高校は三年一学期だけの中途半端な生活から全く新しい生活に入って大変嬉しかった。

門司から夕方関門連絡船に乗って下関へ渡り、関門各地の灯を見ながら、昔の人なら、「男児志を立てて、郷関を出づ、学もし成らずんば死すとも還らず……」というところだなと思った。当時は夕方博多を出て、関門連絡船に乗り下関で特急に乗って翌朝京都に着くというものであった。

下宿は母や長兄が信頼する北白川キリスト教会の奥田成孝牧師のお世話で、北白川西町の主に七高出身の人の下宿で北斗寮といった。以後私と鹿児島との縁が深くなった。下宿の鹿児島県人、他県でも七高出身の人、その後海軍で

尊敬する鹿兒島出身の上官、戦後は史料調査のため鹿兒島県にしばしば行き、フィールドと研究テーマは薩摩藩、原口虎雄先生の指導を受け、さらに鹿兒島県人の家内と結婚して鹿兒島との縁はますます深くなった。

奥田先生の北白川教会に出るように母や兄から言われて出席したが、日曜は大和に行きたい気持ちもあり、熱心ではなかった。ただ、教会から熱河伝道に沢崎堅造氏（元京大講師）を送り出して、そのための祈禱会には心を打たれた。木曜日の夜には和田正先生（京大講師）が近くのお宅で数人のために聖書を読んでくださった。やがて和田先生も熱河伝道に挺身された。私は教会も聖書の会もあまり熱心でなく出席常ならずで申し訳なかったと思う。沢崎さんは、宮本先生が京大経済の講師を一緒の時にしたと言われていたが、熱河で男児を亡くされ、敗戦後に殉教された。戦後入信された飯沼二郎さんが私に親しくされたのは奥田牧師を通してで、熱河伝道を熱心に取り上げられ、ベトナムや朝鮮のために常に訴え続けておられた。飯沼さんには私は農業史の研究や調査で大いに教えられ、『福岡県史』の編纂には大変御尽力をいただいた。

下宿の部屋は離れの二階で、廊下の窓の外は京大の植物

園、すぐ南には吉田山が見えて良い所であった。母屋にも七高、松山高出身の人たちがいて、七高出身で三回生の長崎の西原さんという快男児が皆の人気があり、食堂での食後の雑談は楽しかった。

京都大学は、キャンパスは時計台はじめ広く美しくて吉田山も近く、大学はいろいろと自由だなと思うことも多かった。法学部・経済学部の講義は時計台の下の幾つかの大教室で、英語経済は本館の東の木造の教室であった。図書館は戦争の影響で建設半ばのまま中断、時計台下の大講堂で閲覧させてくれたが、前日に閲覧希望の図書を申し込むと翌日閲覧できるし、高校では閲覧禁止の本が自由に閲覧できるので大変嬉しかった。閲覧できるうちにできるだけ読みたいと一所懸命にカードを引いたのもよかった。いつ読めなくなるか分からないという不自由さを感じたが、それによって却って一所懸命になったわけで、その後不自由なことともよいと思うようになったのもこの時の経験があったからであろう。私が最初に借りた本は津田左右吉『神代史の研究』と『古事記及日本書紀の研究』で、およそ経済学部の学生らしからぬ本であった。図書館で本を読み、夕方帰りに暗くなりかけたキャンパスを歩いていると、

幾つも研究室の灯がともっていて、将来も大学で勉強したいなと思いつながら帰っていた。

一〇月に西洋史学会があつて、次兄と共に原隨田先生の講演を聴いた。次兄が東京に帰るときに「京都は良すぎるから流されるなよ」と言った言葉は忘れられない。私が京都の町々を歩き、奈良、大和に度々行って歴史の土地を楽しく語るので、基本的な勉強をしるよとたしなめたのである。次兄は七年制の東京高校の教授になり、結婚して、一二月には夫婦で京都に来て一泊し、一緒に福岡へ帰った。関門トンネルが開通したので初めて乗って、「便利になった」と喜んだものである。

休暇の時は教練の時間をあまりサボらないように、友達と相談し適当に帰省の期間を決めていた。兄たちの話では昭和初年の大学の教練の時間は配属将校が戦史を講義して面白かったそうだが、我々の時代は中・高・大学通して常に散兵線の小隊長・分隊長の訓練ばかり、今考えると戦場で初級指揮官の消耗が烈しいので、学生出身で補うのが陸軍の方針だったのであろう。

入学後本庄栄治郎先生は……とすぐ思ったが、思いがけなく先生は退官されて大阪商科大学の学長になられていて、

肩すかしを喰った感じがした。週に一度三回生の日本経済思想史の講義をされているので、お顔を拝見するために講義に出たことがあつた。

入学して間もない時であつたが、堀江保蔵先生が日本経済史の講義の中で、近く建国大学（満州国新京）の江頭恒治先生が「日本莊園史」の集中講義をされる。単位にはならないが興味のある者は聴くように、とのこと、四日間くらいの集中講義があつて聴講した。聴講した学生は二〇人位だつたらう。講義は一回生の私には、さすがは大学の講義だなど思うほど高度であつたが、後で考えると、江頭先生が『高野山領莊園の研究』を出版されて、学位論文提出のために本庄先生のもとに來られた時だつたらしい。

高田保馬教授の経済原論は講義にはずっと出席していたが、自分の性には合わないなどという感じのまま出席を続け、二回生になつてもう一度初めから学び直そうということにした。高田先生は九大の講義のため割に長い休講があり、ホツとしたこともあつた。先生の御郷里は佐賀県で帰省の意味もおりだつたらう。私は九大へ転学後、高田門下の栗村雄吉先生で単位を取つた。

日本経済哲学という講義は、なぜ「日本」がついている

のか、時代（右翼）におもねった感じを抱いたが、石川興二教授がわりに面白い講義をされていた。しかし休講が何度も続き、やがて教授は休職になった。河上肇の門下で当局の忌諱にふれたと噂されていたが、誰もそれを問題として言い出せない時代であった。高田教授が替わられたが、これはすばらしい講義であった。

経済学史は白杉庄一郎助教授で重商主義のトーマス・マンから始められたので、やがてアダム・スミス、リカード、ミルなどに進むのだろうと思っていたら、いつまでもトーマス・マンの講義で、これが大学の講義だと驚き、先生を尊敬した。自分で舞出長五郎・波多野鼎の本を読まなければと思ったが、どれほど読んだか、眺めた程度であつたろう。出口勇蔵講師の英経はアダム・スミスの訳読であつたが、関連してマックス・ウェバーを熱心に話された。その後先生はマックス・ウェバーに関する著書を刊行されたので、大学の講義のあり方を知った。

蜷川虎三教授の統計学は経済学者に対して痛烈な皮肉を言われるので笑うことが多かった。試験前に教科書の『統計利用に於ける基本問題』を見ると笑いのうちに大部分講義されているのであわてた。私は蜷川統計学では統計を如

何に批判的に見るべきかを学んだだけでなく、笑いの中に社会科学のものの考え方を学んだ。私と同学年で文化勲章や国際的に多くの賞を受賞した森嶋通夫君は「おそろしく旧式の統計学だった」と酷評しているが、まったく素養のなかった私にとっては笑いの中で端的に社会科学のものの考え方を学ぶことができた有難い講義であつた。下宿の小母さんに先生の話をしたら「先生のお若い時代には奥様がタクシーの運転手をされて先生を支えられていたんですよ」と尊敬していた。

堀江保蔵助教授の日本経済史を聴講した。立派な研究書を出されている方だが、概説書のテキストでの講義は固くて面白くなかつた。試験には私は自信たつぷりだったが、成績は「良」で、まったく意外であつた。堀江さんの西洋経済史も面白くなく、途中で聴講をやめた。どうも私には後々までも苦手の先生で、ずっと後に日本経済史研究所で戦時中に中断した『経済史研究』を再開しようと、私はその急先鋒で理事長・学長にお願いしていた時に、先生は「若い人の意見には慎重に」と内々に反対されたと聞いた。二回生では堀江ゼミに入ったが、ゼミ二回だけで海軍に入った。随分後年に角山栄君と話していたら堀江ゼミで一

緒と知ったが、彼は体が悪くて軍隊に行かず敗戦直後に卒業し、堀江さんに大学院に入りたいとお願いして断られた。それで、彼のような才人が断られたのでは、私が京大在学のままであったら、大学院には絶対入れなかったと思う。

農学部農史講座の黒正巖教授が経済地理を講義された。

本庄栄治郎先生の最初の門下生であり『百姓一揆の研究』で有名な方であるが、地理の講義ではあまり歴史には触れられなかった。しかし先生が書かれている本には原始共同体や朝鮮の市場などがあるので何となく親しく感じた。講義の最後に「試験はするが、別にテーマは自由でレポートを出すように」ということだったので、私なりにフアイトを燃やした。当時は時局迎合のため太平洋の島々の未開社会に関する本が数多く出ていて、学生の目でも「やつつけ仕事」と思う本が多かったが、中には長年の研究の本格的な本も刊行されていて、学生なりに本を見る目を学んだようであった。その頃クノー (H. Cunow) の経済史の訳書が出ていたので、太平洋の島の未開社会をクノーの経済史の原始社会と関連づけて書いてみようと思ひ、夏休みには試験の準備をするつもりだったのに、レポートの方に努力して試験の準備はあまりできず、試験の方は以前と同様一夜

漬で受けた。

当時、北白川の古本屋に、Külscher の Allgemeine Wirtschaftsgeschichte des Mittelalters und der Neuzeit の 1・2 巻が出ていて、当時洋書は入手難の時代だったので、私は柄にもなく将来のために揃えておこうかと思ひ、高校の第二外語でドイツ語の力はないくせに将来のためと思ひ買った(あの頃は良いものがあると何でも買ひだめする時代であった)。結局は一生読まないまま、今も私の書庫の片隅に眠っており、あのころの気負いを懐かしく苦笑するのみである。

私が日々大学に通う北白川の農学部正門の近くには日本経済史研究所があり、ここで将来研究できるようになつたらなと夢み、時々本屋で『経済史研究』を買つたりもして、黒正巖・菅野和太郎・吉川秀造・江頭恒治・大山敷太郎・黒羽兵治郎・堀江保蔵の諸先生とともに、やがて私の恩師となられる宮本又次先生のお名前も見ていた。

黒正先生には、特攻戦死した親友の林市造と私二人のエピソードがある。入学後一、二ヶ月の頃、林と私は嵯峨野の古跡をめぐって祇王寺を訪れ、尼さんに勧められて庵の上に上つたら、黒正先生と陸軍の将官(閣下といわれてい

た)がおられるのに仰天。近くに坐るように言われて坐ったものの入学早々で、教授は今の時代とは違って雲の上の人で、二人とも大いに緊張していた。当時は襟にEを付けているのは京大経済だけで、新入生と分かったようで「僕の講義を聴いているか」と訊ねられ「はい」と答えたが、私たちがあまりにもコチコチに緊張していたので、先生が尼さんに「あれを出しておやり」といわれ、当時絶対にお目にかかれぬ生菓子が目の前に置かれた。薦められても緊張して頂かないまま、ほうほうの体で逃げ出したが、お互いに「惜しかったな、お前が食べれば俺も食べたのに」と残念があった。林が特攻出撃前に書いた手紙が残っているが、その中で高校の級友吉田君に「黒正先生には仇を討つてくれ」と書いているのはこの時のことを言っており、当時吉田君が結核で山科で療養していて、先生のお屋敷が山科だったからである。

大和の古跡、古社寺めぐりは日曜や休日にはよく行った。それは歴史の場に立つ喜びと共に、当時奈良県は京都よりも食料事情が良くて空腹を満たすことができるし、田舎道を歩いていると、路傍に柿などが置かれていて安い値段で自由に持って行けるので趣味と実益をかねた史跡・歌枕め

ぐりであった。

春休みには下宿の先輩西原秀磨さんに誘われて、茨城県内原の満蒙開拓団の訓練所に行った。蒙古のパオに一三、四歳の少年を二、三十人入れて訓練していて、私は福岡県出身の少年のパオと一緒に訓練を受けた。少年たちの話を聞くと、父親の今までの職業が時局の関係で成り立たないため転職し、子供が開拓団に入れられた者が多く、時代のしわ寄せを痛切に感じた。皆健気な少年であったが、あの子たちは北満や蒙古にやられると言っていたが戦後どうなつたらうと暗澹たる気持ちになる。私はここで面癪を患い、パオから出て東京で入院して兄夫婦や姉に看病してもらったが心身消耗した。五月半ばまで療養したが、ぐずぐずして鬱々とした日々を過ごした。京都の小学校の先生が中京区の子供たちの姿や町や店をありのままに書かれた『京の子供たち』という本が楽しくて気を取り直した。

夏休み帰省中福岡にいたが九月に徴兵猶予廃止の発表があり、来るべきものが来た感じであった。京都に帰ってから風邪をひき、京大の学生診療所で受診したら医師から「肺浸潤の初期だ、徴兵検査では必ず言えよ」と言われていたが、風邪が良くなってからはなんのことはないと言われて

考えてあまり気に留めず、一〇月の徴兵検査でも何も言わないままであった。後で考えると医師の言う通りに言うべきであったが、しかし戦争中のことは何が幸いか全く分らない。言わなかったために半年思わぬ苦勞をしたが、そのため予備学生を一期遅れたため、特攻やフィリピンでの戦死を免れたと思うことがある。

一〇月には海軍省から福岡高校・京大経済の先輩の主計士官（後、住友重機常務）が来て、大講義室一杯の学生にソロモン海戦の体験を話し、物凄い航空戦で彼の乗艦も沈められたことを話し、大変な航空戦だ、日本は飛行機が不足、搭乗員が不足。このままでは日本は負ける。搭乗員を増やすため予科練を増募するが、学力不足ですぐには搭乗員にはできない。大学生の学力なら少しの訓練で搭乗員にできる、アメリカも学生の搭乗員が多い。是非「海軍航空」に来てくれという、願いたいより大変きびしい訴えの叫び声であった。新聞、ラジオ等が勇ましいことを言っているが、戦況は不利と感じていたが、そこまでになっているかと深刻に感じ、航空戦に行かねばならないと思うようになった。

徴兵検査は本籍地福岡で受け肺浸潤を黙って第一乙

になり、林市造は甲種合格だった。南禅寺の僧坊帰雲院にいた彼を誘って「哲学の小道」を散歩し、戦争に行くことを話しながら、なんとなく若王子のキリスト教墓地に入り、墓碑銘の聖句を見ながら感銘を受け、「我は甦りなり、命なり 我を信ずる者は死ぬとも生きん」の墓碑の前で海軍航空のことを話し合った、彼は海洋部のキャプテンで海軍に詳しく海軍に親近感を持っているが、幼い時に父上を亡くして、幼い時から一家の代表として扱われ、母上に苦勞をかけていると言い、「母は陸軍に行きなさいと言うんだよね」と悩んでいた。特攻の時の遺書にも「母の言う通りにすべきだったかな」と書いている。彼とは河野博範先生の聖書研究会で一緒に、一年の春休みに寮で合宿し『死に至る病』を学んだ仲で、彼は特攻に決定後の日々『死に至る病』を再び読み、読み終えて「すぐく人生へのファイトを感じる」と療養中の友人の吉田に宛てた手紙に書いている。

兄・姉にお別れのため上京したが、兄からは掌に入る小型の新約聖書をもたらした。兄が中国の戦線で丸三年ポケットに入れて慰められ、励まされたものであった。また兄は矢内原忠雄先生のもとに連れて行ってくれた。私自身は勇

んで入隊しようとしていたのであるが、先生は入隊する私に同情して、むしろ憐れむようなお言葉をかけられた（他の多くの方々が激励の言葉を下さる中）ので、当時の私にとってはとても意外であった。しかし私自身入隊の後の苦労を経て数か月後には、先生のお言葉の真情に気づいた。

御長男が一期の予備学生で、南方に従軍されていて、精神疾患の者が多いと言っているとも言われていた。

やがて二月一〇日に佐世保第二海兵団に入り、林市造とは同じ分隊であった。やがて翌年二月一日に土浦海軍航空隊に入隊、飛行専修予備学生となった。

五 従軍、家は戦災、敗戦、復員

従軍中のことは、さきに「戦時中の私と聖句」〔南の風〕一三七号、二〇一六年三月）と「福岡大空襲のあととわたし」〔西日本文化〕四七五号、二〇一五年七月）に書いたので、以下簡単に触れる。

一九四三年一月二月佐世保第二海兵団に入団。翌年二月に土浦航空隊に入隊、飛行専修学生となったが、三月に肺浸潤のため罷免、海兵団に帰され一等水兵として勤務（何等の診察も療養もなかった）。九月に一般兵科の旅順予備学生

教育部に入部。翌年特攻兵器震洋艇に志望、三月川棚の水雷学校分校魚雷艇訓練所に入所、特攻学生になったが、後に特攻をはずされ、七月に少尉、魚雷艇長として川棚突撃隊勤務。その後人間魚雷回天を志望。分隊長宇都宮大尉に止められた。山下汽船の輸送船に輸送指揮官付で天草、出水、米の津、水俣、三池、口之津、長崎等を廻った。このことは後に九州の経済史研究のために役立った。やがて第三一突撃隊に転動したが、私の艇に司令飛田健二郎大佐を乗せて深夜出港、翌日長崎で正午近く、原爆の閃光と轟音に出あった。やがて敗戦。家は六月福岡空襲で全焼。母と嫂、幼児二人の避難先の飯塚市に復員した。

以後戦災の屋敷跡を整理しサツマイモ・南瓜作り、庭の焼けた樹木で薪作り。やがて突撃隊の残務整理で、当時下宿していた長崎県小佐々町の家を訪ねて泊めてもらい、その秋の美しい海岸で、戦時中佐世保で買った上原専祿の本『独逸近代歴史学研究』を読み、その中に書かれている古ゲルマン社会を読み自分も日本の古代社会について同様の研究をしたと思った。戦後の私の学問の出発点であった。私の留守中に母と長兄が相談して、京大蜷川経済学部長の勧めで九大への転学の願書を出していた。私は京大に

復学しなかったが、戦災と青島にいた父の未帰還、在外資産の損失等でやむをえないと思った。

六 九州大学法文学部への転入学

宮本又次先生との出会い

一九四六年四月九州大学法文学部に編入学したが、大学は多数の復員学生、軍系学生でゴッタ返しの混乱状態で、教授も疎開や戦災、病気などで休講が多く、大学には中学・高校・海軍での友達に会い、戦中・戦後をタベリに行くようなものだった。やがて講義も多くなつたが、大学としては多数の学生を早く卒業させ平常に戻すために、レポートや比較的易しい試験で卒業させたため高校の同級生は四六年九月・翌年三月までにほとんど卒業した。もつとも官庁・会社等が混乱して就職は大変だったらしい。高校理科の成績上位で航空工学科にいた友達が中学校の先生になるような時代であった。

当時私は九大に宮本又次先生がおられることは全く知らず、将来の方針も定まらないまま、父の用事で上京し、途中車中から広島の惨憺たる状況に衝撃を受けた。帰りには京都に寄り田淵節也君（後の野村証券社長・会長）に会った。

海軍で同じ隊の二隻の魚雷艇の艇長で小隊を組んでいた仲で、話しているうちにやはり京大で学びたいと思い、彼も来いよ、何とかなるからと言うので、経済学部の事務室に転学を取消しに行ったが、すでに九大に書類は行っていると云われた。この時京大に復学していたら宮本又次先生には会えず、京大では堀江保蔵先生が大学院に入れてくれる筈はなく、全く別の道にゆかねばならなかったであろう。

当時家は戦災で全焼し、四五年末に新居に移り、四六年春に父が中国から帰ってきた。私とお手伝いさんとで焼け跡を整理して畑で芋や野菜を作り、焼けた樹木を伐って薪にして家に運び、田舎の親戚から米を調達した。兄は毎日銀行勤めで余裕はまったくなく、父母と兄夫婦、幼児二人と私、お手伝いさん（戦時中ずっと母のそばにいて支えてくれた）の八人家族の食糧難を乗り切るため焼け跡の整理と畑作りをしながら畑に坐り込み、今後どうしようかと長い時間あれこれ悩んでいた。

四六年秋学期になって宮本又次先生の経済学演習に出席した。宮本先生が九大におられることは全く知らず、前期の時間表にはおそらく「フランス語経済・宮本」で載っていたのであろうが、フランス語は関係ないと見落したの

であろう。京都の頃『経済史研究』でお名前は知っていたが、演習に出て初めてお会いした。その時「この先生だ」とまったく先生に魅了され、この先生について行こうと強く思った。明るくてソフト、全くものにこだわられず、該博な知識を持っておられ、学生の言うこともよく聞かれるので、ものが言いやすく、まさに私の人生で最大の幸運の時であった。

演習室二階の大部屋の演習室に三、四十人もの学生がためかけて、およそゼミの態をなさぬほどであったが、先生はテキパキと各人にテーマを割り当てられた。私が経済史を学ぶために本庄先生のおられる京都大学に行ったこと、黒正先生、堀江先生・江頭先生の講義を聴いたこと、京大での学生生活などを話したので、面白い学生がいると思われたのであろう、ゼミの世話人の一人にしてくださった。

先生は私に博多織を割り当てられたので県立図書館や郷土史家を訪ねたりしていたが、あるとき先生が九大には九州文化史研究所というのがある、そこに「博多津要録」という史料があり、その中に博多織が出るだろうからと文化史の筆写員大野・北条・中村さんに紹介の名刺を下さったので訪ねた。私が九州文化史研究所を訪れた最初であった。

勿論古文書はすぐには読めず、筆写生に習いながらボツと読み習っていた。しかし三、四度訊ねると、あとは訊ねにくくなり、当時は古文書の読み方を教える本は皆無で『崩し字辞典』で学んだ。こうして文化史に通っている時に、三月頃だったが、宮本先生の奥様がお芋を抱えにこられた。北条さん・中村さんが糟屋郡の田舎から来ているので先生がお芋を頼まれていて、奥様が受けとりに来られたとのことなので、「私を持ちましょう」と奥様にお供して先生のお宅まで運んだ。それで先生のお宅を知り、以後度々お訪ねして色々とお話して頂き大変楽しく、私の人生の目標も定まった。先生には助手も院生もいなかったの、いつも先生と私の一対一で親しくお話できて、まことに幸いであった。

「博多津要録」はよく読めないものの、本来の博多織に對して幕末期には庶民層のための粗悪な木綿博多織が出廻ったことが分かり、絹の博多織と木綿博多織の對抗の問題をテーマにレポートをまとめたが、後々まで「博多津要録」には愛着があり、後に藤本隆士・武野要子・松下志朗・東定宜昌君と校訂し出版した。また『博多津要録総索引(事項・人名・地名)』(試作編)を編集し、Web上で検

索できるようにして多くの人に利用してもらい、批判や助力を得たいと思つて現在作業しているのも、都市史料としての魅力と若い日の思い出や愛着があるからである。

四七年春学期になり、私は兄のように研究者の才能が真にあるかどうか、よく確かめようともう一学期学生を続け考へることにした。その頃先生が「文化史研究所の名護屋組文書の中に無足人が多数見えるが、無足人は普通どこでも下級武士なのに、名護屋では庶民層の者のようだ。調べてみないか」と言われたので、近世後期の名護屋組の宗門人別改帳や各年度の覚帳などに取り組み、院生になつてからも続けて、一人で名護屋に行き、古文書もまだ自信がないまま調査して小論文「無足人に関する一考察」を書いた（題は先生が付けてくださった）。先生は三橋時雄先生に頼んで下さり『日本史研究』第九号に載せていただいた。この無足人は、その後、唐津藩だけでなく、平戸藩・五島藩にもいて、いずれも庶民層なので中世の無足人に通じるものがあり、『経済史研究』五号に「処女論文から半世紀を経て新史料に接して―無足人のこと―」を載せて頂いたが、その後も史料を見出している。名護屋からは無足人で肥前生月島の鯨組にも羽差^{はぎ}として行つた者もあり、おそら

く鯨組の納屋の職人としても稼ぎに行つたのではないかと思っている。

七 九州大学法文学部

九大法文学部の良さは大きな一つの建物の中に法科・文科・経済科が一緒に仲良く住んでその境目はつきりしないところであり、悪く言えばごちゃ混ぜだが、便利でもあつた。法文経各科の者が入り混じつてお互いに顔見知りとなり、学科とは別に教官・事務・学生たちが親しくなる良さがあつた。後に宮本先生が出張講義に来られた時に、私の研究室（以前の先生の研究室）で天井を仰ぎながら「九大やなあ」と笑われたが、重厚すぎる建物で、教官机も重厚な木造（私は学部移転で廃棄処分の際に譲り受けて書齋の机にしている。先生のお机であつたので愛着がある）、すべてが過大、「鈍重」感の建物は九大法文学部の性格を示すようであつた。後方に大きな階段教室が二つ、別館に美学の瀟洒な階段教室があつたが、今はすべて廃墟になつた。法本文館の前の二階建ての演習室は、その後も産業労働研究所から石炭研究資料センターとなり、今は記録資料館の産業経済資料部門になつているが、戦後矢内原忠雄先生が全

学講演の後に質問の学生との対話のため演習室に來られた時、驚かれたほど良い建物であった。昭和初年文部省が学生への赤化対策に力を入れた時の建物だと言われていた。

私は経済の学生としては経済学関係の単位は最小限の単位数で卒業した。宮本先生からは京大の単位で堀江さんの日本経済史が良では大学院特別研究生（以下、特研究生とする）に推薦できないから、再度先生の日本経済史の試験を受けるようにと言われ受験した。

経済学のほかはいろいろ聴講し、ソウルの京城帝国大学から赴任された秋葉講師の「朝鮮の村の民俗」（タイトルの記憶は不確かだが）や国史に着任の森克己教授の中世貿易史や鏡山講師の考古学などを受講した。金田教授の日本法制史や尾崎教授の美学は単位にならないが聴講。法律は高校時代はナチスに心酔した教授のくだらない講義で嫌だったが、九大での法制史は近世の商業取引の講義で法制史は凄いな学問だと思った。美学はバッハの講義で難しかったが、時間の後半にレコードを聴かせてくれた。窓ガラスは幾つも割れたままだが窓越しに冬空に浮かぶ木の梢を見ながら、生きて再び学問をし、音楽を聞ける喜びを強く感じたのは忘れられない。

法制史の金田平一郎先生と宮本先生は大変お親しく（真面目なお兄さんと自由気ままな弟、といった感じであった）、九州文化史でお二人がお話しされるのを聞くのは楽しく、笑うことが多かった。宮本先生は金田先生を尊敬されていて、謹厳な金田先生とざっくりばらんの宮本先生という性格の違い（お二人（お年は六、七歳違っておられた）のやりとりは絶妙でユーモアにあふれていた。夏休みには両先生の秋月黒田家の古文書の調査にお供した（黒田家の御曹司が宮本ゼミであった）。昼食後先生方は涼風をうけて昼寝されたが、私は読めない古文書をあれこれと眺めていた。

八 特研究生の採用と近世庶民資料調査

一九四七年九月卒業したが、その少し前に金田・宮本両先生に新任の国史の森先生も加わられての長崎、平戸の史料採訪にお供した。九州文化史で筆写のため長崎県立図書館から文書を借り出されるため、宮本先生が君の読みたい文書も借りてあげようと言われたが、私には全く見当がつかずお応えできなかった。平戸は小さい藩であるが、中世以来の城・武家屋敷等伝統のある藩で、特に武家の言葉は方言ではあるが上品な美しさを感じ心を打たれた。この

時は商家でじゃがたらお春の「じゃがたら文」を見た。

やがて経済の教授会で特研究生の詮衡があり、私は特研究生になった。宮本先生の御推薦で「この学生は古文書が読めます」と言われたら、学部長の森耕二郎先生が「とつてやれ」と言われたので採用されたそうだ。森先生は京大時代に黒正先生とお親しく、森先生がパリ留学中大いに遊ばれて、資金がなくなると黒正先生に「(天理教のように) タスケタマエと電報するとすぐ送金してくれた」そうで、後々までその話をされていた。宮本先生が九大に助教授で来られたのは本庄先生のご推薦だが、事実上は黒正先生による人事だったらしい。当時特研究生は戦時中の数少ない良い制度の名残りと言われ、戦時中は兵役の義務なく、助手よりも特研究生の方が上で助教授の補充をしようとしたもので、戦後も特研究生の詮衡は厳しかった。私は助手にしてみらえればよいと思っていたが、黒正先生のおかげで特研究生になれたらしい。

特研究生は研究以外は義務がなく、助手同等の給与(研究費の名目)で、前期二年・後期三年。先生方からは「特権生ですな」と冷やかされた。研究指導は宮本先生で、研究テーマを私は「農村奉公人になりたい」と言ったら、先生は

「それは問題が広がりすぎて大変だよ」と言われたまま、別に先生から新しくテーマはお示しにならなかった。金田・宮本・森先生にお供して長崎・平戸に行った時、車中で先生が金田先生に「秀村君は農村奉公人を研究したいと言っています」と言われたら金田先生は「それは良いテーマだ」と言われた。宮本先生は金田先生の大阪の法制史的な研究や「雇傭労働史論」を高く評価されていたので、先生は農村奉公人を「やらせてみるか」と思われたのである。中田薫著『法制史論集』第三巻の「徳川時代における人買及び人質契約」・「同 補考」や金田先生の近世の雇傭法や中村吉治・古島敏雄・庄司吉之助・森嘉兵衛等々を読むように指導された。東北、信州等の東日本の研究が多く、西日本は未開拓に等しく、九州はこれからだと思ったが、研究を進めているうちに、村々の庶民生活全般を学ばねばならないと思い、先生が言われた「問題が広がりすぎるよ」と言われたことが身にしみた。

戦後、社会経済の急激な変化からこれまでの各地方の地主、町方の豪商、網元などが没落して所蔵の古文書の散逸が烈しいので文部省により庶民史料調査委員会が設置された。全国を地区区分して九州では九大を中心に各大学の教

授や地方史家が委員で、若手の講師、助手、特研究生を調査員として調査、採録した。九大では当時附属図書館長の金田先生を委員長に森克己・竹内理三・喜多野清一・宮本教授や旧制福高の玉泉大梁教授が委員、桧垣講師や助手・特研究生が調査員となり手分けして広く各地の大庄屋・庄屋、町方の豪商、浦方の網元・船主などの家々を訪れて古文書の調査、採録をした。

これまで研究されていた多くの大名や江戸・大坂・京都の豪商とは別に、全国の村々・町々・浦々の調査で膨大な調査結果が出された。近世から明治末期までと指定されていたが、近世、ことに近世後期の文書が大変多く、明治期には及び得ず、せいぜい明治一五年位までようやく及ぶくらいであった。この調査は昭和二八年で終わり、その後、報告書『近世庶民史料所在目録』（第一輯〜第三輯）が出ている。この調査を契機に多くの近世史料が公開され、調査にあたった若い研究者によって近世史の研究が大変発展した。

この庶民史料調査では私は宮本先生・玉泉先生の助手として各地の調査をして大変啓発された。各地の村々の古文書の膨大さに驚き近世農村史を研究するようになり、奉公

人、とくに質奉公の研究を始めた。また喜多野先生の指導で筑後山北村河北家で同族団の研究、また海への郷愁から生月島益富家を調査し鯨組の研究をするようになり、その後も庶民史料調査を土台に調査を拡げて、多くの恩恵を受けたのである。

最近強く思うのは、現代は以前の庶民史料調査の時よりもさらに近世史料や近代、戦中戦後の史料の散逸が深刻で、図書館や図書館に頼るだけでなく、再び若い層を抱きこんで全国的に近世文書の補充調査と近現代の文書資料保存の必要を痛感している。私自身ささやかながら少数の同志とともに資料の保存、採録、筆写、史料集刊行をしてきたが、さらにもう一度全国的に採録の組織づくりを呼びかけて頂きたいものである。

九 宮本教授の大阪大学御転任 助教教授就任

以前から宮本先生にはご郷里大阪の大阪大学から、新設された法経学部の教授に御就任の要望があつていたが先生はそれに応じられることになり、さらに特研究生の私・作道・洋太郎・原田敏丸三人の身の振り方も一挙にお決めになった。阪大法経学部の助教教授に私、助手に作道君、大分大学

経済学部講師に原田君としていただいた。一九五一年三月は先生の御宅の御転居の準備で毎日三人が先生の御宅に詰めて愉快にご転居のための荷物造りに活動し、毎日夕食は奥様のお手作りの御馳走で宴会、先生と楽しく話しあった。

ところがしばらくして急に先生が「九大教授を兼任することになり、秀村君は九大の経済学部の助教になることになったよ」と言われて驚いた。教授会で、都留大治郎さんが特研生としてあと半年なので農業政策講座の助教にとの話となり、ついでに経済史講座の留守番として私の採用となつたらしい。戦時中は人材不足で大正ゼロ年代生まれの助教は二人だけだったので、私達二人が補充され、以後補充が続いた。私は特研生の期間がまだ一年半もあるのに勿体ないと思つたが贅沢な不満であつた。

宮本先生は阪大に御転任の時に、「大阪は生まれ故郷なので、九大に未練はないが、九州文化史には未練がある。よろしく頼むよ」と言われた。私が晩年まで九州文化史に入りするのは、この時の先生のお言葉が忘れられないからだろう。先生は一九五九年まで九大の集中講義をされたが、九大法文経の天草の総合研究では一九五二年夏、九大での集中講義の後、経済史・法制史班を率いて上島を廻ら

れ、その後院生も加えて天草の豪農・豪商石本家の研究を指導し総括して執筆された。以後『九州経済史研究』を編集され、九大の院生藤本隆士・篠藤光行・大村（武野）要子を育てられた。もつとも後に篠藤君は鹿児島大学の私の友人達が私を助けるために講師に採用してくれたが、向坂逸郎先生に強引に勧められて全通の労組に行つてしまった。そういう時代であつた。

助教は外国語経済書の担任で、森学部長からアダム・スミスでもやるかと言われた。スミスは京大で出口勇蔵講師の英経を受講したがその時、関連してマックス・ウェバーを熱心に説かれた。九大では田中定教授がただ訳説を急がれるだけだったので、私なりにスミスをどうやろうかと考えていた時に、非常勤講師で行つていた西南学院大学の新着書紹介の書架のDobb, M. *Studies in the Development of Capitalism*, New York, 1947を見出した。宮本先生がドップの以前の著書を利用して大塚史学を批判されたことがあるので、この新着書をテキストにして学生とともに自分の勉強をしようと思つた。当時は新任の助教は一週一コマ二時間だけの外国書講読で呑気なようだが、私には九大での初めての講義なので緊張した。先生の奥様が「秀村

さん、講義をされると下痢をされますよ」と言われたので、先生でさえ初めは下痢をされたのかと、安心もし、心強く思った。以後助教時代はずっと英経で、ドツブやドツブ・スイージー論争やイギリス経済史の本のいくつかを読んだ。日頃は古文書と日本語文献ばかり読んでいる私には、よい勉強になった。都留さんはドイツ語経済でエンゲルスをされていたが、学生の話では「何頁から何頁までは、俺にはよう分からんから飛ばす」と言われたそうで大胆だなど感心した。私は小心で、自信のない所は西洋法制史の吉田道也教授に習った。吉田先生は私の次兄と小・中・高・大学（学部は別）ともに一緒に、兄貴に習う感じであった。当時は助教授は就任二・三年後から演習、四年目位に特講を担当するものであった。若手の育成に余裕があったらしい。

ソ連に抑留された中学時代の友達が私の英経に出席したので優をやるから出席するなと頼んだり、B29迎撃のため薬物を投与されて空中戦を戦い精神に異常をきたし、戦後九大病院で療養、回復した元戦闘機搭乗員が復学してくる時代であった。

こうした戦後の混乱の中でチンピラ助教として出発し

た私は、宮本先生にいつも長い手紙を差し上げた。先生からは常に御返事をいただき、いろいろ教えもいただき、指示もされた。あとで思うと、先生の近くに居たよりもかえってよかったのかもしれない。そのうえ竹内理三先生（古文書学、中世史）と喜多野清一先生（農村社会学）に私の指導をお願いされ、竹内先生には史料集刊行のお手伝いをしながら教えられること多く、喜多野先生は私が取りこんでいた筑後山北村にも二度ほど来ていただき、いろいろ御指示して下さり、宮本先生と全く違う御性格にかかわらず仲がよろしくて懇切に指導して下さりありがたかった。経済学部のマル経主導、労働運動・組合運動に熱心でなければ睨まれる時代になんとか生き延びたのは、二人の先生のおかげであった。

小稿を草するにあたっては服部民子氏に並々ならぬお世話になった。心から感謝の意を表する。

（ひでむら せんぞう・九州大学名誉教授）